

鴨長明著「方丈記」岩波文庫、岩波書店 1989年5月16日刊を読む

1. ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
2. よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたるためしなし。
3. 世中にある人と栖と、又かくのごとし。
4. たましきの都のうちに、棟を並べ、麓を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬ物なれど、是をまことかと尋ぬれば、昔しありし家はまれなり。
5. 或は去年焼けて今年作れり。
6. 或は大家滅びて小家となる。
7. 住む人も是に同じ。
8. 所もかはらず、人も多かれど、古見し人は二三十人が中に、わづかに一人二人なり。
9. 朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。
10. 不知、生れ死ぬる人、いづかたより来りて、いづかたへか去る。
11. 又不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。
12. その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。
13. 或は露落ちて花残れり。
14. 残るといへども、朝日に枯れぬ。
15. 或は花しぼみて露なほ消えず。
16. 消えずといへども、夕を待つ事なし。

一 文選・歎逝賦による(十訓抄)など、諸説がある。

二 水の上に浮かぶあわ。泡沫。

三 一方では。

四 玉を敷いたように美しい、りっぱな意。宮中の庭などをいうところから、枕詞のように用いた。

五 屋根の瓦。「争ふ」はその棟瓦の高さを競っている意。

- 六 近世の木版本では「アル」とよむ。
- 七 「うたかたは、かつ消えかつ結びて」に対応。同時に命短くはかない気持ちを含める。
- 八 倒置法。「生れ死ぬる人...いつかたへか去る(ということ)を知らず」の意。
- 九 ほんの一時の宿のような現世の住居。仏教では生死を繰り返し流転してゆくと考え、この世はその中のかりそめの一時であるとする。
- 十 朝顔の花と花の上に置く露。

[コメント]

大不況下ではあっても現代日本はここまでには至っていない。この「方丈記」で著者の鴨長明(かものながあきら、一般にはかものちょうめい)は何を訴えたかったのかをゆっくり考えてみたい。

- 2009年10月13日 林明夫記 -